

原発はオワコン 原子力防災を進めよう

守田敏也

原発からの命の守り方

2023

福島原発事故から12年を踏まえて



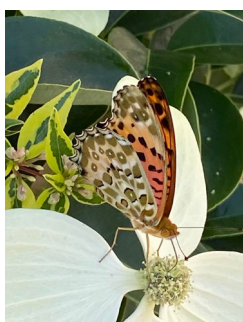
原発からの命の守り方 2023 ～福島原発事故から12年を踏まえて～

2023年3月11日で、あの福島原発事故から12年が経ちました。いまここであらためて「原発からの命の守り方」をみんなで共有していきたいと思います。ぜひ一緒に学んでいきましょう。

なお「3・11原発ゼロ・被災者支援奈良のつどい」にお招きいただき話した内容を元に冊子を編みました。

目次

1 福島原発事故とは何だったのか	… 2
2 福島原発事故からこれまで起こったこと	… 5
3 原発推進策は愚かで展望がなくて危険なだけ	… 7
4 GX会議とバラマキ政策	… 10
5 福島と広島、長崎は結びついている	… 12
6 原子力災害対策を進めよう	… 15



1 福島原発事故とは何だったのか

福島第一原発の事故は、本当にとんでもない危機をこの国にもたらしました。あのとき日本の半分、東日本が放射能汚染によって壊滅する危機の目前にありました。

それが避けられたのはなんと三つの偶然が重なったからでした。まずはこのことを見ていきましょう。

偶然の一つは、原子炉の格納容器が大爆発を免れたことでした。

2011年3月11日、福島原発は地震に伴う事故で1号機から3号機までメルトダウンしました。格納容器内が高温になり、放射能を含んだ蒸気が充満して容器が大爆発する可能性がありました。

あのとき東京電力は「ベント」を試みました。ベントとは装置の弁をあけて、格納容器の中のガスを排出することです。しかしもともとベントは設計段階ではついていませんでした。格納容器は、いざという時に放射性物質を閉じ込めること、中のものを外に出さないことを役割としているからです。

ところがゼネラル・エレクトロニクス社が、原子炉を世界中に売って、建てて、運転を開始してしまった後に、コンピュータシミュレーションで、過酷事故が起きたら、格納容器が壊れてしまうことがあることが分かり、後から急ごしらえでベント装置を設置したのでした。このため元東芝の設計士、後藤政志さんは、ベントを「格納容器の自殺装置」と呼びました。

しかしこうした後付けの装置はうまく動作しないことが多いのです。最初から設計思想に組み入れられてないからです。実際に福島原発事故時するときにも、三つの原子炉でベントが試みられましたが、どれもうまくいきませんでした。

「このままでは大爆発、大惨事必至」ということで、現場はマニュアルにないあの手、この手を試み、1号機



福島第1

最悪170キロ圏は移住

原子力委員長 3月シナリオ作成

東京電力福島第1原子力発電所が170キロ圏内で行われた冷却機能が失われ、1、2、4号機で相次いで水素爆発が起った。2号機も中心浴槽内で大量の放射能物質が放出された。3月11日の地震や津波による燃料プールは、170キロ圏内から半径170キロ圏に拡大した。3月11日の地震や津波による燃料プールは、170キロ圏内から半径170キロ圏に拡大した。3月11日の地震や津波による燃料プールは、170キロ圏内から半径170キロ圏に拡大した。

毎日新聞 2011年12月24日

と3号機はなんとかベント弁を開けたのですが、2号機は何をやっても開けられなかった。この時、故吉田福島第一原発所長は「東日本が壊滅すると思った」と、後に証言しています。

ところが、福島原発がどれも老朽化したオンボロ原発だったため、実は2号機も内側からの圧力に思ってたより弱く、放射性物質を含んだガスがパンパンに充満する前に格納容器のどこかが裂け、大量の放射性ガスが抜け出ていったのでした。なんとそれで大爆発を免れたのです。それでも大量の放射能が東日本を汚染したので「不幸中の幸い」だったなどとはとても言えませんが、大爆発ですべての放射能が出てしまい、広範な地域が無人地帯になる事態だけは免れました。

二つ目は4号機の核燃料プールの問題です。4号機は運転していなくて、炉内に核燃料はなく、燃料プールに使用済みでかなり高温になったものが移されていました。ところが事故で冷却装置がダウンしたため、プールの水がどんどん減っていききました。そのまま核燃料がむき出しになると火災が起きて放射能が飛び出し、さらに自分の熱で溶けて、プールから抜け落ちてしまうところでした。そうなたら現場はできることが何もなくなり、撤退するしかなくなる。

その場合どうなるのか。当時、内閣府におかれていた原子力安全委員会の近藤駿介委員長が試算したところ、膨大な地域に汚染が広がり、福島原発から半径170キロ圏が強制避難、東京を含む250キロ圏が、希望者を含む避難ゾーンになるところでした。170キロ圏は10年間は戻れない。まさに東日本が壊滅しかかっていたのです。

ではどうしてそうならなかったのかというと、次のような理由からでした。

原子炉の中に圧力容器を覆っているシユラウドという部品があります。これもまたポンコツで、よくひびが走ってしまうもので、ちょうど交換工事が行われていたのです。そのため空になった原子炉の上部まで水がはつてありました。しかも当初の予定では3月7日に作業を終えて、水が抜かれるはずでしたが、作業が遅れて3月11日もまだ水がはられていたのです。

4号機の燃料プールはその横にあり、原子炉上部にはられた水と、仕切り板で分けられていましたが、プール側の水がどんどん減ったため、仕切り板に圧力がかかり、勝手にずれて、格納容器上部の水が燃料プールに流れ込んだのでした。それでプールは干上がりを免れ、最悪の事態には至らなかったのです。

三つ目はヘリコプターによる水の投下するとき、一か八かの対応が行われ、偶然にも破局に至らなかったことでした。

あの時、自衛隊のヘリコプターが海から大きなバケツに水を汲み、原子炉の上からかけたシーンを覚えている方が多いと思うのですが、あれはなんのための行為だったのかというと、「テスト」だったのだそうです。2021年3月にNHKが特集番組を作って明らかにしています。

何のテストだったのかというと、当時、原子炉はメルトダウンをしていて、とにかく水を注いで冷やさなければならなかったのですが、高温になったものにいきなり水をかけると、瞬時に膨大な水蒸気が発生して、爆発してしまうことがあります。

あの時も、水をかける以外の選択肢はなかったのだけれど、かえって爆発を起こしてしまう可能性もあったので、自衛隊の決死隊が作られ、爆発しないかどうか、確かめにいったのです。

結果的に爆発は起こらず、作戦に関わった方たちは胸をなでおろしたようですが、爆発したらそれ以上の冷却ができなくなり、撤収が余儀なくされたでしょう。現場の方たちも即死したかもしれない。そこから東日本壊滅へとつながった可能性大でした。

この三つの偶然が重なる中で、東日本は壊滅を免れました。しかしそれでも膨大な放射能による広大な大地の汚染は止めることができませんでした。壊滅はしなかったけれど、相当に深い被害を受けてしまいました。

そもそも原発は、ポンコツの湯沸かし器でしかありません。1950年ごろに作られたローテクで、今でもお湯を沸かすことしかできないプラントです。そんなものに国の半分を獲られてはいけません。それが福島原発事故の教訓なのです。

2 福島原発事故からこれまでに起こったこと

続いてあの事故が起こってから今日まで何が起こったのか見ていきましよう。

何より強調したいのは、私たち民衆がこの間、原発を次々と止めたことです。何基止まって廃炉になったのか。21基です。その炉心分の危険性を民衆の力によって低減させたのです。

福島原発事故前は54基が稼働可能でした。今は33基、しかもそのうち実働しているのは10基だけです。民衆が大きな声を上げたからこそこうしたことが実現したのです。

とくにこの力の先頭になって下さったのは、あのとき、真っ先に危険地帯から逃げだした方たちです。その方たちが全国に散らばって原発の危険性を訴えてくれたのです。そのことで私たちは民衆の力が強くなりました。

東日本大震災の発生前、54 基の原発



東日本大震災以降、21 基の廃炉が決定
2023 年 3 月時点で、再稼働は 10 基のみ

- ・大飯 3・4号機(関西電力)
- ・高浜 3・4号機(関西電力)
- ・美浜 3号機(関西電力)
- ・玄海 3・4号機(九州電力)
- ・川内 1・2号機(九州電力)
- ・伊方 3号機(四国電力)

※いずれも西日本エリアで、「加圧水型」
(事故を起こした福島第一原発は「沸騰水型」)

さらに私たちは「高速増殖炉もんじゅ」も止めました。廃炉に追い込みました。

もんじゅは核燃料サイクルの核心部でした。もともと核燃料に使えるウランの埋蔵量なんて少ない。でもウランを炉心に入れて使うと、核分裂せず、燃料に使えないウランから、新たに核分裂するプルトニウムができてくるのです。それをさらに「再処理」して取り出して、今度はプルトニウムを燃やして発電すると、プルトニウムを使って発電しながら新たにプルトニウムを作れる。それを実証するためのプラントが高速増殖炉もんじゅでしたが、結局、もんじゅは完成させられなかった。何度も遅延とトラブルを繰り返す中で、私たちが「もうやめなさい」と声を上げ続けた結果、廃炉が選択されたのです。

だから核燃料サイクルによって、「永遠のエネルギーをつかむ夢」を実現しようとした「原子力」は、もう終わったコンテンツ、オワコンなのです。「原発はオワコン」、この言葉を流行らせましょう。

実際に原発はオワコンだからこそ、輸出しようとしたけれども、一つも買ってもらえませんでした。安倍元首相がトップセールスだとか言い、国の総力を挙げて売るといったので、多くの方が、「あんな事故を起こしたのに、危ない原発を輸出してしまうのか。世の中は暗いな」と思ったと思いますが、しかし実際には私たちは、1基も売らせませんでした。

僕もこのためにトルコに4回行ききました。なぜトルコに通ったのかというと、故安倍首相が最初にトップセールスで飛んでいった相手が、トルコのエルドアン首相だったからです。さらにもう一つ大きなことがありました。2013年9月に、ブエノスアイレスで行われたオリンピックピック招致演説でした。あのとき安倍さんは“The situation is under control”と大嘘をつきましたが、この招致をめぐる東京のライバルはイスタンブールだったのです。だからトルコの方たちもあれを観ていました。

また大事な点としてあるのは、トルコがとても篤い親日国だということ。日本人は深く信頼されています。だから僕に声がかかったのです。その日本人がトルコに来て「日本の原発を信頼してはいけない」と言うて欲しいというところで、それが僕のミッションになりました。

だから僕は4回行って、たくさん都市で講演して、「トルコのみなさん。うちの国の首相は大嘘つきです。決して信用しないで下さい」と言ったのです。そうしたらやんやの喝采が起り、講演が終わったら必ずトルコの男性が3人ぐらいやってきて「いやいやうちの首相も大嘘つきだから」と言うのでした。

そんなことが各国でいろいろと積み重ねられて、結局、どの国も日本の原発を受け入れませんでした。これは各国の民衆と私たちが連携して作り出した成果です。だからこれからも、幾らでも原発を止められるのだということをおさえておきましょう。

3 原発推進策は愚かで展望がなくて危険なだけ

しかし岸田政権がまったく愚かで、展望などまったくなくて、ただただ危険なだけの原発推進策にのめり込んでいます。これを次に分析しましょう。

この話の核心は「次世代革新炉」を作ることにあります。みなさんはどう思われるでしょうか？次世代に革新的な技術が採用され、安全性がはるかに高い原発ができるのだと言うのです。でも、それなら今の原発は危ないということですよ。語るに落ちています。

例えば三菱重工はコアキャッチャーをつけた原発を作ると言っています。原子炉格納容器内で、メルトダウンして落ちてきた核燃料をキャッチするので安全だと言うのです。仮にそれで良いとするなら、コアキャッチャーがない原発はダメだということになります。そうしたら、今動いている10基の原発はもちろん、日本にコアキャッチャーのついている原発など一つもないのだ



うちの国の首相を信用しないで下さいと発言するとやんやの喝采が

から、すべて動かしてはならないのです。

さらにそもそも原子炉はメルトダウンなんてしてはいけないのです。メルトダウンすることを「過酷事故」といいますが、これは設計段階で考えられた安全装置が、すべて突破された段階を言います。メルトダウンなんて想定外のこと、もはや何が起こるか分からないのです。だからこれまで、いかにメルトダウンをしない原発を作るか、技術開発を重ねてきたのに、とうとう諦めたのです。結局、最後まで、メルトダウンしない仕組みを開発できず、原発の安全性を確保できなかったのです。

この他に小型モジュール炉、高温ガス炉、高速炉、核融合炉などが持ち出されています。でもよくみると核融合炉のほかは2040年代にやっと「実証炉」ができるというのです。

次世代原発の主な種類	
革新軽水炉	デジタル技術で安全性を高めた。既存技術がベースのため最も開発が進む
小型モジュール炉	出力30万キロワット以下。設備の大半を工場で生産し、工期や建設費を削減
高温ガス炉	炉内の温度が高くエネルギー効率が高い。水素も取り出せる
高速炉	高速の中性子により高効率で核燃料を燃やせる。核のごみも少ない
核融合炉	水素原子が核融合する際のエネルギーを活用。安全性が高い

日経新聞による分類

そもそも最初に作るものを「実験炉」、その次を「原型炉」といいます。もんじゅが原型炉でした。それを安全に発電できるかどうか試し、次に商業的に成り立つかどうかを調べるのが「実証炉」です。もんじゅはそこまでいけなかったわけですが、実証炉ができて、やがて実際に運転する「実用炉Ⅱ商業炉」ができるのです。その営業運転の前の実証炉完成が、やっと20年以上先の見込みだというのです。

そんな計画、まったくあてになりません。そもそも、もんじゅだつて1995年8月に運転開始したものの、わずか3か月と少しで深刻な事故を起こし、結局その後、運転再開にこぎつけることができなかつたのです。さらに六ヶ所村の核燃料再処理工場も1997年に完成予定だったのに、2022年末までに26回も予定を延長しています。それでどうして新型炉だけ20年で実証炉に辿り着けるといえるのでしょうか？

核融合炉にいたっては夢物語もいいところ。こんなものを今後の計画の中に入れること事態、まやかしかもいいところ。これを今後の見通しに組み込むことを認めた技術者たちのモラルが問われます。

小型モジュール炉もあまりに滑稽です。なぜって基本的なアイデアが1950年代に発案されたものだからです。それが今まで使われなかったのは、経済性、安全性で問題があったからです。使えなくてお蔵入りになったアイデアなのです。

その点で今の軽水炉は、いろいろと試行錯誤を繰り返してきた、原発開発の中での「最進化型」なのです。その「最進化型」がメルトダウンなどの過酷事故を避けられないのです。だから次世代革新炉にも、なんの現実的な展望もありません。

展望がない中で、唯一現実的に進められようとしているのは、老朽原発を、無理やり動かすことです。でもこれもすぐに壊れます。実際、2023年3月段階で高浜原発3号機が止まっていました。なんで止まったのか。制御棒が落ちてしまったのです。制御棒が制御できていないのです。

このような体系に展望があるはずはないし、実はそれを一番よく知っているのは現場の技術者、労働者たちです。だから現場のモラルも道徳ベースションもどこも著しく低下してしまっている。技術的なウソがたくさん重ねられていることを嫌というほど知っていながら、黙らされているからです。

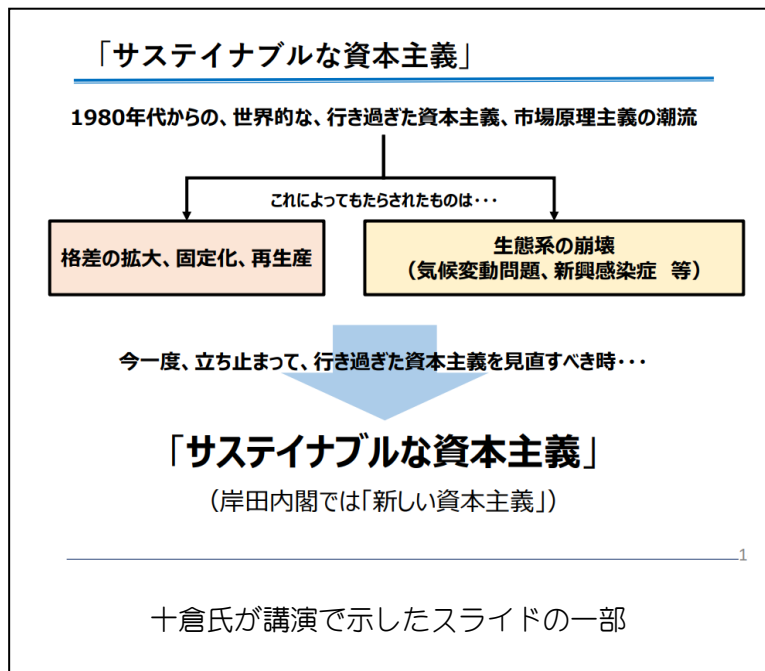
こんな状態ですから、このまま放置すれば、福島原発事故と同じか、もつと恐ろしい事故が起きる可能性大です。だからこそ、私たちはこの計画の無謀性をきちんと明らかにして批判し、みんなで声を上げて止めましょう。繰り返ししますが、今までもどんどん止めてきたのだから、この先も必ず止められます。諦めないことが肝心です。権力者に騙されず、自分たちに自信を持ちましょう。それもまた、原発から命を守るためにとても大切なことです。

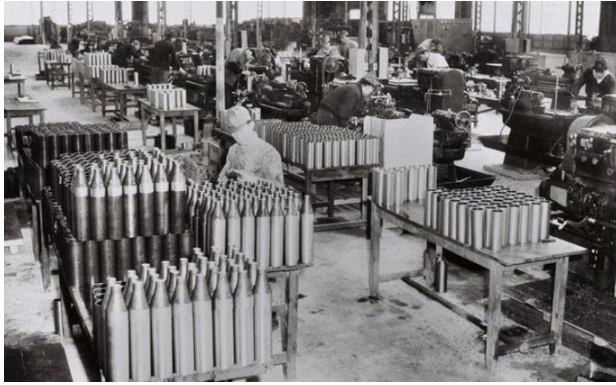
4 GX会議とバラマキ政策

もう一つ、おさえておきたいことがあります。GX会議というのは実は原発推進だけが目的ではないのです。GX会議は「新しい資本主義を進める」とこととセットです。岸田政権が登場したときに言い出した「新しい資本主義」です。

これについて2021年末に十倉経団連会長が講演しています。「2022経済展望とサステイナブルな資本主義の道筋」というタイトルです。僕もそれで気が付いたのですが、十倉氏は今の資本主義を「行き過ぎた資本主義」と言っています。経済格差を広げ、生態系を壊したと。ある意味でひどさを認めているのです。「今一度、立ち止まって、行き過ぎた資本主義を見直すべき時…」とまで言っています。

では見直すために何が必要なのかというと、僕の恩師の宇沢弘文さんが唱えた「社会的共通資本」を守る考え方が大事だと言っています。これには腹が立って仕方がありません。社会的共通資本とはみんなの共有財産のことです。社会制度で言えば、日本国有鉄道や郵政がそうでした。それらの公共のものを先頭に立って壊してきたのが経団連です。そして経済格差をどんどん広げ、環境を破壊してきたのが経団連なのです。だから「行き過ぎた資本主義」というのなら、過ちを反省して「行き過ぎた儲け」を返すべきです。でもそんなことは言わない。では何をしようとしているのでしょうか。





米軍の砲弾を作る日本の工場 朝日新聞デジタル版

今の経済政策は新自由主義と言います。その軸にあるのが緊縮財政なのですが、それを終わりにして、バラマキ財政に転換しようとしているのです。バラマキ財政はケインズ主義といいますが、その対象によって大きく意味が違ってきます。では岸田政権や経団連がどこにバラ撒こうとしているのかというと、とにかく「脱炭素化」と言えば、何でもお金が出るようにしようとしています。エネルギー部門、技術部門に潤沢に資金を回そうとしているのです。その基軸の一つに位置付けられているのが原発です。さらにGX会議の項目には入れてないのですが、実はバラマキの対象として大きく狙われているのが軍拡です。

そもそもケインズ主義には、一方で社会福祉を充実させようとするモメントもあつたものの、他方で「軍事スペンディング」に大きく傾斜した過去を持っています。とくに戦後は著しくて、朝鮮戦争やベトナム戦争にアメリカがたぐさんのドルを支出し、それで資本主義各国の経済的活況が作られていったのでした。とくに日本はアメリカの「軍事スペンディング」で大儲けしました。そんな中で朝鮮戦争による「特需景気」によって日本の「戦後復興」が成り立ちました。恥ずべきことです。アメリカが潤沢なドルを人殺しに使い続けることで、戦後の資本主義世界経済は回ったのです。

いま、それと似たことが狙われています。このために利用されているのがウクライナ戦争です。各国が次々と武器をウクライナに送り込んでいきます。どちらの陣営でも軍需産業が大儲けしています。その中で岸田政権は、さらにアメリカの軍需産業を儲けさせるために、トマホークなどのミサイルを爆買いしようとしているわけです。こんなことには決して与してはいけません。戦争を止めよとの声も強めていきましょ。

5 福島と広島、長崎は結びついている

さてその点を踏まえた上で、あらためてしっかりと把握しておきたいのは、私たちが原発に反対するのは、事故が起こると放射能が飛び出してくるからという点です。放射能は命にとつてとても危険です。ところがその放射能の被害や危険性を、ものすごく過小評価してきたのが、広島、長崎の大虐殺から続いてきた流れなのです。

どういふことかというところ、ご承知のようにアメリカは広島、長崎で原爆による大量虐殺を行いました。明らかな戦争犯罪でした。ただしこの点でぜひ知っておいていただきたいのは、核爆弾で最初に被害を受けたのは、広島の方たちではないということです。1945年7月16日にアメリカ軍はニューメキシコ州のアラモゴードという町の周辺のトリニティサイトというところで、人類初の核実験を行いました。周辺住民は何も知らされていませんでした。だから核爆弾による最初のヒバクシャはその方たちなのです。さらに放射線被曝ということ言えば、原爆を作るためにウランを掘らされたアメリカの先住民族の方、ウランが出てきた世界各地の先住民族の方が最初のヒバクシャです。

そして広島と長崎で大量虐殺が行われたとき、ヨーロッパで生物学者や疫学者から大きな抗議が起こりました。そのころまでに放射線が今で言うDNAを切断し、次世代にも影響を与えることが分かっていたからです。それで「これは未来世代への攻撃でもある。アメリカは即刻謝罪して、核兵器を廃棄すべきだ」という声が上がったのです。

それに対してアメリカは、核戦略そのものとして、放射線被曝の危



核実験で犠牲になった家族の写真を掲げた
女性とともに アラモゴードにて

険性を隠しました。そのためのテクニックがあります。放射線被曝の影響は爆心地から半径2キロ以内にしかなかったと言いつ張ったのです。爆心地で放射線を浴びた人の被害は、とてももみ消すことはできませんが、2キロより外であった被害のことは記録せず、まったく無視したのです。

しかし2キロ先でも、あちこちで黒い雨が降ったことをすでに多くの方がご存知だと思います。死の灰が放射性プルームとして広く飛んでいって、雨やチリとなってあちこちに降ったのです。しかしその被害はこれまで一切、カウントされてきていません。そしてこうした被害の多くをカウントせずに成り立った「放射線防護学」が今も生きています。アメリカが内部被曝の被害を隠したまま作り上げたのですが、それが放射能をめぐる「安全」の基準として、今も世界中で通用しているのです。

だから私たちが本当に原発を止めていくために、あるいは核兵器を無くしていくために大事なものは、放射線被曝の被害をしっかりとつかみ、広げ、命を守ることを訴えることです。

そのために僕はこれまで、琉球大学名誉教授の矢ヶ崎克馬さんとともに岩波ブックレットから『内部被曝』を出版してきました。また「よきによきプロジェクト」に参加して、『放射線副読本すつきり読み解きBOOK』を作成しました。文科省から出された放射線被曝の被害をきちんと書かず、ないかのように扱った『放射線副読本』を読み解いたものですが、これらをぜひ参照していただきたいです。



無料でダウンロードできます！
https://nyoki2pj.com/lp/info_yo_mitokibook/

冊子版お申し込みもできます！
<https://onl.bz/qKRSYkW>

そもそもあの福島原発事故の時にも、たくさんの方が被曝しました。周辺の住民のみならず、消防署員、警察官、自衛官、海上保安官の方たちなどが、避難のために奔走した役場の職員さん、消防団員、

しかし被害報告が一件も出ていません。おかしいと思わないでしょうか。ものすごい量の死の灰が出て、多くの人が被ったのに、一件も被害が報告されないのは、事実が隠されているからです。

さらにヒバクシャとは誰なのかと考えたときに、私たちの誰もがヒバクシャであることを自覚する必要がある。なぜか。私たちは誰もが核実験で、めちやくちやに被曝させられているからです。

核実験は、広島や長崎の大量虐殺後、放射能でどんな被害が出るか分かっていながら、大気中で行なわれたのです。何度も何度も。アメリカと旧ソ連を合わせただけでも400回を越えます。それで世界中の人々が被曝させられています。

顕著な例を言います。日本人男性、とくに50代後半以降の方で、ガンになられる方のうち、いま一番多いのは前立腺がんです。10万人ぐらいの患者さんがおられます。

でも1975年のデータを調べてみると、前立腺がんの患者数はわずか2500人だったのです。ほとんどまれな病気だったのです。女性の場合は同じような感じで乳がんが増えています。

これは死の灰のうち、セシウムが生殖器に集まる傾向を持っていることで加速されてきたと推察されています。セシウムは「肥料の三要素」の一つのカリウムに化学的特性が似ている(あと二つは窒素とリン)、人体は、セシウムをカリウムと間違えて、せっせと生殖器に送り込んでしまっているのだと思われま

す。それやこれやで私たちの間ではどんどんガンになる方が増えているし、とくに乳がん、前立腺がんなどの患者数が伸びるばかりです。

これらからも私たちが、さまざまに被曝による影響を受けていることが分かります。それはさまざまに

遺傳的影響も引き起こしているはずです。だからそのリスクとしっかり向き合い、互いをケアして命を守り合っていく必要があります。

そしてさらに、そうやってすべての命を危険にさらしている放射能の被害の「まかし」に対して声を上げていくことが大切です。そのために『内部被曝』や『放射線副読本 すつきり読み解きBOOK』を活用していただきたいです。

6 原子力災害対策を進めよう

以上のことを踏まえて、それぞれの地元で原子力防災を強めていくこと、深めていくことを提案したいです。

すでに指摘したように、原子力政策にはなんの展望もありません。いつか必ず破綻して終わります。でもそれまでに再び深刻な事故が起こるかもしれない。また核廃棄物は何万年も管理しなければならず、どこかで事故、漏出が起こる可能性が大きくなります。

だから私たちは残念ながら原子力災害に備える必要がありますが、どうせなら遅く備えましょう。この点から原子力防災にとっての大事なポイントを書き記しておきます。

原子力防災にあたって一番大事なのは放射線被曝の危険性をしっかりとつかむことです。ここが揺らいでしまうと、いざとなると「少しぐらいなら大丈夫」と被曝を許容してしまいかねない。前章で、広島、長崎への原爆攻撃以来、放射線被曝の危険性が隠されてきたことをしっかりとお伝えしたのもそのためです。

その上で実際に核事故に遭遇した時に大事な点は何かをまとめます。これらはあらゆる災害にも通じることですが、最も大事なのは①とつとと逃げる、②心のバリアをとる、③被害を少しでも減らすの三つです。

「とつとつと逃げる」とは危険地帯からすぐに逃げだすこと。核事故の場合は放射能が届かないところまですぐ逃げることです。そのためには心のバリアをとっておかないといけない。逃げ出すのは大変なことですから、人は自分の心の中に「逃げなくても大丈夫」というバリアを築きがちだからです。また減災の観点、すべてを防げなくても少しでも被害を小さくする努力もとても大切。核事故なら被曝を少しでも減らすことです。

とくに核事故で飛び出してくる放射能には「半減期」があり、事故の当初には半減期の短いものがたくさん出てきます。これらはいっぺんにたくさん放射線を出すのでそれだけ早く減っていきます。そのため事故当初の方が放射線値は圧倒的に高い。だからとくに核事故の場合、とつとつと逃げるのが肝心です。

また被曝には外部被曝と内部被曝があります。外部被曝を避け、低減するには、放射線源から遠ざかるか遮へいすることが大事。内部被曝は体内に放射性微粒子が入り込んで内側から被曝することですから、とにかく体内に放射性物質を入れないことが大事です。

避難するときには大事なものは次の三つのことです。①ハザードマップや事故予測などを信じすぎない、②どんな状況でもけしてあきらめずに行動する、③率先避難者になる。

とくに原子力災害について、政府はとても甘い予測を公表しています。あたかも30キロ圏内に被曝の影響が収まるかのような口ぶりですが、実際の原発事故はどこまで破局的に進むか、予測などつきません。政府の事故予測を、けして信じてはいけません。

他方で反対に事故が破局的になることばかりを考えてしまうと、「何をしても無駄」とも思えてしまいます。あくまでも「少しでも被曝を減らす」という観点に立ち、いざとなったら、どんな状況でもあきらめずに心身を守るべく行動する心構えを作っておきましょう。

またこれもあらゆる事故への対応につながるのですが、誰かが率先して逃げ出すと他の方の避難を促すことにつながります。その点で「率先避難者」になることを心がけましょう。

原発事故で逃げ出す目安はどこにおいたらいいでしょうか。私たちの勘は捨てたものではないので、原発事故に際して「逃げだした方がいいのでは?」と思ったらず飛び出してください。その上でより確かな情報が欲しい方は、原子力災害特別措置法(原災法)で第十条通報が出たら、避難の合図と考えて下さい。これが出るときには原発の内部で相当深刻なことが起きているのは間違いないからです。

なお原発事故に備えて唯一、被曝から身を守る薬に「安定ヨウ素剤」があります。事故の時に飛んでくる放射性ヨウ素から、甲状腺を守る薬です。他の放射能にはなんの効果もないので注意が必要ですが、ともあれこれを手に入れておきましょう。

甲状腺はのどもとにあり、自然界にあるヨウ素(海産物などにたくさん含まれている)を採りいれて成長ホルモンなどを作っています。私たちの身体は放射性ヨウ素と接したことがなくて、体内に入ってきたときに危険なものと同別できず、自然界にあるヨウ素のように甲状腺に運んでしまいます。このためあらかじめ甲状腺を自然界のヨウ素で満たしておいて、放射性ヨウ素を入れなくしてしまうのが「安定ヨウ素剤」の効能です。

ぜひお住まいの地域の行政にかけあい、備蓄や家庭への配布を要請して下さい。また身近なお医者さんについて処方をお願い出してください。お医者さんごとに判断が分かれるかと思いますが、処方して下さいる方もおられます。それで

丹波篠山市のハンドブック
『原発災害にたくましく備えよう』を活用して下さい
(ダウンロードは以下から前半・後半あり)

も入手できない場合は、海外から並行輸入などで取り寄せることができます。

なおサプリメントは本当にヨウ素が含有しているか、きちんと精査されていないので注意が必要です。

原子力防災について、より詳しく知りたい方は、兵庫県丹波篠山市が発行しているハンドブック『原発災害にたくましく備えよう』をご参照下さい。僕が草稿作成や編集に関わったものです。またこれをテキストに作ったビデオ解説『原発からの命の守り方を学ぼう』もご参照下さい。

最後に原子力防災について、「原発を認めるものなのでは」という声もあるので一言述べさせていただきます。

一つに原子力防災は、現にいま原発が動いていて、今この瞬間にも深刻な事故が起こる可能性があるので必要とされること。事故に備えることが、原発を認めることにつながるわけではありません。

二つに事故が起これば、原発に賛成している人も反対している人も、同じように被曝の危険性にさらされます。とくに避難を判断できない立場にいない子どもたちが最も危険です。だから原発賛成の方とも一緒に原子力防災を重ね、いざという時に少しでも多くの人を互いに守り合えるようにしたいものです。

三つに現実に原発事故に備えようとする、最もリアルに原発事故のことを考えることになります。避難のこと、被曝への備えを考えれば考えるだけ、具体的に原発の危険性が見えてくるからです。だからこそできるだけ多くの方と原子力防災を進めていただきたいのです。そのことがいざというときに、少しでも多くの方が被曝を免れる知恵を養うことにつながるからです。原発事故には海外で遭遇する可能性もありますから、誰もが必要な知識を身につけておいていただきたいです。



動画QRコード

以上、たくさんのことを見てきましたが、最後にもう一度、私たちが私たち民衆の力に自信を持つことの大切さを強調しておきたいです。

私たちに力があるからこそ、原発はどんどん減ってきました。核燃料サイクルも止まりました。輸出も一つもできませんでした。いま核産業はがけつぷちにあります。だから絶望的な巻き返しを図っているのです。

しかしどうあがいたって「原発はオワコン」です。核燃料サイクルなどもう復活することはありません。技術的に破たんしているのです。そんな中で次世代革新炉開発だって、そう簡単には進まないでしょう。そもそも計画通りにできたとしても20年先です。結局、安全性を確保できないので、この先も原発はトラブルが続き、電力会社もメーカーも、経営困難が深まるのは必至で、原子力から撤退する日は確実にやってきます。

ただしそれまでに深刻な事故が起きてしまう可能性があるし、その場合は日本の半分が吹き飛ぶのです。そんなことになってはいけません。だから原発の終わりをもっと早める必要があります。そのために原発に反対する声をさらに高めましょう。これとともに原子力災害への備えを進めていきましょう。

原発からの命の守り方を、大きく広げていくことをみなさんに訴えます。

2023年3月11日

原発からの命の守り方 2023

〜福島原発事故から12年を踏まえて〜

2023年3月11日 発行

著者 守田敏也

発行者 三ツ素削を配つてみ@京都

連絡先 中津めぐみ megumi@nakatsufude.jp